

## (16) こかぶ

### ア 各病害虫の防除

萎黄病

根くびれ病

根こぶ病

黒腐病

軟腐病

モザイク病

白さび病

アオムシ

アブラムシ類

カブラハバチ

キスジノミハムシ

ヨトウムシ

コナガ

ネキリムシ類

ハスモンヨトウ

ナモグリバエ

センチュウ類

ダイコンシンクイ(ハイマダラノメイガ)

ナメクジ、カタツムリ類

## ア 各病害虫の防除

### 【留意事項】

(□は総合防除計画に掲載している病害虫)

### 萎黄病

---

(耕種的・物理的防除)

- 1 汚染ほ場では、6～9月の栽培を避ける。
- 2 発病株は抜き取って処分する。

(薬剤防除)

- 1 土壌消毒をする([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照)。(耕種的・物理的防除)

### 根くびれ病

---

(耕種的・物理的防除)

- 1 連作を避ける。
- 2 排水を良くする。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 薬剤を作条施用土壌混和する。

### 根こぶ病

---

・[共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)および[根こぶ病菌によるあぶらな科野菜根こぶ病の防除の項](#)を参照する。

(耕種的・物理的防除)

- 1 発病ほ場では抵抗性品種を作付ける。
- 2 発病歴のないほ場を選定する。
- 3 連作を避け、あぶらな科以外の作物と4～5年以上のサイクルで輪作する。
- 4 遊走子が根に感染するためには水が必要であるため、ほ場の排水を良くする。
- 5 水稲後作では高さ20～30cmの高うねとし、うね内の停滞水をなくす。
- 6 地温が18℃以上で発病するため、は種時期や定植時期を調整する。
- 7 pH7.2以上では発病が抑制されるため、土壌pHを矯正する。
- 8 罹病残さから休眠胞子が拡散するため、発病株は早期に抜き取り、ほ場外に持ち出して処分する。
- 9 発病ほ場から耕うん機等を移動する際には、機械に付着した休眠胞子を取り除くため、土をよく払い落とし、丁寧に水洗する。
- 10 ほ場内のあぶらな科雑草も伝染源となるため、除草を徹底する。
- 11 地床育苗する野菜では、4～5年間あぶらな科作物を栽培していない、排水条件の良い場所に、は種床を設置する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 薬剤によって土壌消毒する([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照)。
- 2 薬剤を施用する

### 黒腐病

---

(耕種的・物理的防除)

- 1 発病ほ場へのあぶらな科作物の連作を避ける。
- ※子葉頭部、葉縁等の水孔から侵入する。17℃以下では発病しない。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 薬剤を散布する。

### 軟腐病

---

(耕種的・物理的防除)

- 1 3～4年間イネ科、まめ科の作物を作付ける。
- 2 降雨直後に農作業をしない。
- 3 発病株は見つけ次第取り除く。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

1 生物農薬は予防的に散布する。

※使用期間中にやむをえず他剤を併用する場合は、農薬安全使用に関する参考資料の章の天敵等への化学農薬の影響の目安の項を参照し、影響の少ない農薬を選択する。

2 薬剤のいずれかを散布する。

3 根や地際を害する害虫(キスジノミハムシ、ナメクジ、線虫など)を防除しておく。

## モザイク病

---

## (耕種的・物理的防除)

1 シルバーポリマルチをする。

※発芽直後から20日間、特に数日のうちに最も多く伝染する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

1 発芽直後から20日ころまで、飛来する有翅アブラムシを防除剤により防除する。本項の[アブラムシ類の防除](#)を参照

## 白さび病

---

## (耕種的・物理的防除)

1 発病しやすい畑ではあぶらな科作物の連作を避ける。

2 被害茎葉は除去する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

1 薬剤を全面土壌混和する。

2 薬剤を散布する。

## アオムシ

---

## (予防に関する措置)

1 苗への産卵を避けるために、育苗床を防虫ネット等により被覆する。

2 ヘアリーベッチ、大麦等を使用したリビングマルチの活用により、土着天敵の定着を促進し、密度抑制を図る。

3 あぶらな科植物で増殖するため、ほ場周辺の雑草(特にあぶらな科雑草)の防除に努める。

## (判断、防除に関する措置)

1 発生予察情報、ほ場の見回り等に基づき、若齢幼虫時に薬剤散布等を実施する。

※一般的に老齢幼虫ほど薬剤が効きにくい。

2 作物残さを適切に処分する。

(薬剤防除) [農薬登録情報【アオムシ】](#)

1 発生が予想される場合には、薬剤を散布する。

2 生物農薬を使用する場合は、予防的に使用する。

## アブラムシ類

---

## (耕種的・物理的防除)

1 育苗時からアブラムシ類の発生に注意する。黄色粘着テープを施設の出入口や開口部の近く、若しくは苗の近くにつるし、有翅成虫が飛来していないか確認する。

2 近紫外線除去フィルムは成虫の飛来を減らす効果があるので、これらのフィルムを施設の外張りやトンネルに使用する。

3 施設では、側窓や天窓などの開口部に寒冷紗や防虫ネット等を張り、成虫の飛来を防ぐ。

4 マルチをする場合は、シルバーポリマルチなど忌避効果のあるものを使用する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

1 生物農薬は予防的に散布する。

※天敵の放飼と薬剤散布(殺菌剤を含む)とを併用する場合は、[農薬安全使用に関する参考資料の章の天敵等への化学農薬の影響の目安の項](#)を参照し、天敵に影響の少ない農薬を選択する。

※アブラムシ類の生息密度が高まってからの放飼は十分な効果を得られない場合があるので、発生初期からの放飼が重要である。また、アブラムシの種類と天敵の組み合わせによっては、効果が認められない場合がある。

2 天敵微生物製剤

※使用期間中にやむをえず他剤を併用する場合は、[農薬安全使用に関する参考資料の章の天敵等への化学農薬の影響の](#)

[目安の項](#)を参照し、影響の少ない農薬を選択する。

※アブラムシ類の生息密度が高まってからの散布では十分な効果を得られない場合があるので、発生初期からの処理が重要である。

- 2 気門封鎖剤を散布する。
- 3 発生が予想される場合には、薬剤を散布する。抵抗性の回避のため、異なった群から薬剤を選びローテーション散布を行う。

## カブラハバチ

---

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発生が予想される場合には、薬剤を散布する。

## キスジノミハムシ

---

(耕種的・物理的防除)

- 1 あぶらな科植物で増殖するため、あぶらな科作物を連作しない。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 薬剤を施用（散布）する。発芽後、初期から薬剤を7～10日おきに散布する。

## ヨトウムシ

---

(予防に関する措置)

- 1 防虫ネット等の使用により、成虫の飛来及び産卵を防ぐ。
- 2 ほ場内及びその周辺の雑草の防除に努める。
- 3 施設栽培では、成虫の侵入防止対策として、換気窓等の施設開口部への防虫ネットによる被覆や防蛾(が)灯(黄色灯)の夜間点灯を行う。
- 4 交信かく乱剤を使用する。
- 5 施設栽培においては、栽培終了後に蒸込み処理を行う。

(判断、防除に関する措置)

- 1 卵塊や若齢幼虫が群生している葉を見つけ次第、除去する。
- 2 発生予察情報を参考に、ほ場の見回り等による早期発見に努め、発生初期に薬剤散布等を実施する。
- 3 作物残さを適切に処分する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発生が予想される場合には、薬剤を散布する。

## コナガ

---

(予防に関する措置)

- 1 防虫ネット等の使用により、成虫の飛来及び産卵を防ぐ。
- 2 ほ場内及びその周辺の雑草の防除に努める。
- 3 交信かく乱剤を活用した防除を行う。
- 4 施設栽培においては、栽培終了後に蒸込み処理を行う。

(判断、防除に関する措置)

- 1 卵や若齢幼虫が寄生している葉を見つけ次第、除去する。
- 2 発生予察情報を参考に、ほ場の見回り等による早期発見に努め、発生初期に薬剤散布等を実施する。
- 3 作物残さを適切に処分する。
- 4 生物農薬を活用した防除を行う。

(耕種的・物理的防除)

- 1 施設では、開口部に防虫網を設置して成虫の侵入を防止する。本虫に対しては、1mm×1mmの目合いで効果が高い。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発生が予想される場合には、薬剤を散布する。
- 2 コナガは薬剤抵抗性が発達しやすいので、農薬を使用する場合には、同一系統の薬剤の連続使用を避け、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。さらに、地域内で薬剤抵抗性等が確認されている薬剤の使用判断については指導機関の指示に従う。

## ネキリムシ類

---

(耕種的・物理的防除)

- 1 被害株の地際にいる幼虫を捕殺する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 薬剤を施用(散布)する。

## ハスモンヨトウ

---

・共通防除の章のハスモンヨトウの防除の項を参照する。

(予防に関する措置)

- 1 防虫ネット等の使用により、成虫の飛来及び産卵を防ぐ。
- 2 ほ場内及びその周辺の雑草の防除に努める。
- 3 交信かく乱剤を活用した防除を行う。
- 4 施設栽培では、成虫の侵入防止対策として、換気窓等の施設開口部への防虫ネットによる被覆や防蛾(が)灯(黄色灯)の夜間点灯を行う。
- 5 施設栽培においては、栽培終了後に蒸込み処理を行う。

(判断、防除に関する措置)

- 1 中齢幼虫以降になると薬剤の防除効果が著しく低下してしまうため、卵塊や若齢幼虫が群生している葉を見つけ次第、除去する。
- 2 発生予察情報を参考に、ほ場の見回り等による早期発見に努め、発生初期に薬剤散布等を実施する。
- 3 農薬を使用する場合には、同一系統の薬剤の連続使用を避け、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。さらに、地域内で薬剤抵抗性等が確認されている薬剤の使用判断については指導機関の指示に従う。
- 4 生物農薬を活用した防除を行う。
- 5 作物残さを適切に処分する。
- 6 常発地ではフェロモントラップを設置するなどして発生消長を確認しながら幼虫の防除を行う。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 若齢幼虫のうちに、薬剤を散布する。

## ナモグリバエ

---

・共通防除の章のナモグリバエ類の防除の項を参照する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発生が予想される場合には、薬剤を散布する。

## センチュウ類

---

・共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項を参照する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 薬剤を定植前に土壌混和する。

## ダイコンシンクイ(ハイマダラノメイガ)

---

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発生が予想される場合には、薬剤を散布する。

## ナメクジ、カタツムリ類

---

(耕種的・物理的防除)

- 1 野菜くずの捨て場等の発生源を除去する。
- 2 ほ場の通風や排水を良好にし、地表部を乾燥させる。
- 3 農作物の過繁茂を避け、収穫後の畑はできるだけ早期に整理する。
- 4 畑周辺の小かん木、小竹などの茂みを伐採整理し、不必要な石積等は取り除く。
- 5 畑周辺の清掃を図った上で、潜伏場所となるような濡れむしろ等を設置し、誘引捕殺する。

(薬剤防除) 農薬登録情報 [【ナメクジ類】](#)・[【カタツムリ類】](#)

- 1 粒剤は雨が降ると有効成分が流亡してしまうので、天候を見極めて活動直前の夕刻に処理する。ハウスや温室内では、2～3日間はかん水がかからないようにする。残効期間は短い。